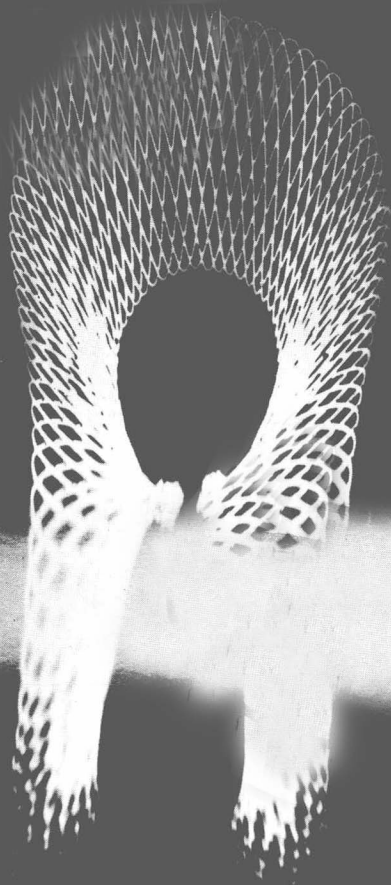


白昼の密漁

戸川昌子





白昼の密漁

戸川昌子

© 1966
MASAKO TOGAWA

白 昼 の 密 漁

第1刷 昭和41年5月20日

著者 戸川昌子

定価 290 円

発行者 野間省一



発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽町3-19
振替 東京 3930
電話 東京 (942)1111(大代表)

Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替え致します

印刷所 東洋印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社

白昼の密漁
目次

死火山	114	蝕	106	釣餌	98	逆転	89	慰安旅行	81	尾行	73	情事の裏	64	間引き	56	密通	48	ホテルの客	40	亀裂	31	壺	22	渦巻	15	罌の装飾	7
-----	-----	---	-----	----	----	----	----	------	----	----	----	------	----	-----	----	----	----	-------	----	----	----	---	----	----	----	------	---

夜の帰趨	122
紆余曲折	130
ライバル	139
連続台風	146
死者の平等	154
調査の深度	162
遺書	170
偽餌	178
渋	186
陰極	194
接近	202
転位	211
鑑別	219
循環	227
あとがき	236

装幀 田中一光

白昼の密漁

畏の裝飾

1

十一時を過ぎていた。

ビルの窓から射しこむ朝の光が、氣怠い午後の日射しに變ろうとしている。

光文生命、新宿支部の營業所の中は閑散として、二、三の職員のほかには誰もいなかった。九時半からはじまる三十分ばかりの朝礼のあと、百名ちかいセールの女たちは、新しい顧客を求めて散ってしまう。

ふだんは陽気な營業所長の室からも、しわぶきの声

一つ聞こえないのは、本社の調査課の役員が密談に來ているからである。

近ごろ、前よりなんとなく疲れやすくなった。御園登代子は、來客用のソファに腰をおろしながらそう思う。三年前にはじめて保険のセールスをはじめた頃も、着物の裾が一ヵ月ですり切れるほど張りきって歩いたせいで体重が減り、頬までそげおちたものだ。が、新しい環境になれてしまうと、すぐにまたつやつやと精氣にあふれた肌にもどった。

それが最近の氣怠さは、うまく説明できないが、駄のしんがぼうつと熱いような感じなのである。ときどきじんましんも出る。自分では三年間の緊張の疲れが鬱積し、出ているのだと思っている。

あれもこれも、みんな壁に貼ってある成績表のせいではないだろうか。營業所の壁には、各自の毎月の契約高の成績を示す大きなグラフが貼ってある。このグラフの赤い線に脅かされて馬車馬のように働き、神経をすりへらしているのだ。

登代子の成績は今月も一位である。二位を三百万は

ど難している。

いつもは、やり手の鶴田峰子とぎりぎりの線で一位を争うのだが、今月は五百万円の大口の契約があったので、峰子を楽に難したのだった。

峰子とは、いつも激しいライバル意識を燃やす。峰子は、二十八歳で未婚だと言っているが怪しいものである。父親の關係でいいコネをつかんでいるらしい。大学の英文科卒というのを、いつも鼻にかけている。

登代子は、そんな峰子の顔を見ただけで、心がおだやかでなくなってくる。波打ってくる。へんに鼻にかかった喋り方や流し目、毎日のように替えてくる洋服の色まで腹が立ってくるのだ。

しかし、登代子は決して顔には出さない。表面はしとやかに、なにげなくつきあっている。それだけに、競争心は絶え間なくすぶり続けるのかもしれない。以心伝心で、むこうはむこうでこちらの憎悪をかぎっているだろう。

今月の成績は、登代子のほうが鶴田峰子よりグラフの先が五十センチほどのびているが、来月もそうとは

限らない。今月は沢山とれたと威張っていた峰子だけに、一位をとられてさぞ口惜しがっていることだろう。

だから、峰子はきっと今月の登代子のメーターの伸びをあれこれ詮索するにちがいない。詮索されると、ちょっと都合のわるい理由が登代子にはあるのだ。

かすかな勝利感を味わいながら登代子がメーターの赤線を倦かずに眺めていると、所長室のドアがあいて、所長の大田黒が短軀をのぞかせた。いつもは愛想のいい根ら顔の猪首が、今日はむつりとして登代子を手招いた。なにか難しいことがありそうな気配だった。「こちらが御園くんです」

大田黒が登代子を本社の人で紹介すると、坐るようと手つきですすめた。すでに登代子のが、二人のあいだで話題になっていたとみえる。そんな部屋の空気であった。

男はちょっと椅子から腰を浮かせると、軽く会釈をした。仕立のよいダブルの背広を着た痩せ型の紳士である。物腰がどこことなく外国生活をおくった人間を思

わせる。ただ、ふちなしの眼鏡の奥から光る目つきが鋭く冷たい。

「ちょっと困ったことがおこつてね……」

と、大田黒が言葉をさがすようにして口をきった。

「なんでございましょう」

「今月、あなたのとった五百万円の三倍保証の契約ねえ……」

「はい」

「あれには間違いないでしょうねえ」

「あのう、間違いと申しますと……」

登代子は内心の動揺を押しかくして、営業用の笑いを浮かべた。営業用といっても登代子の笑いは、人から見ると実に自然でわざとらしくない。すましている顔は少し冷たい美しさだが、笑うとそれがくずれて愛くるしい顔になる。人に好かれる微笑である。だから営業所でセールの一、二を争っていられるのかもしれない。

それにしても、なぜあのことがこんなに早く本社の耳に入ったのだろうか——登代子は微笑の裏で、すば

やく頭を回転させていた。

今月、あの五百万円の契約をとった顧客には、二年前の胃の手術のあとがあった。過去三年間の手術は、契約を禁じられている。それを会社の嘱託医の多原に頼んで、見逃してもらったのだった。客がそのまま健康を保っていてくれさえすれば会社の得になるとだし、別に不正を働いたとは思っていないからだった。

「いや、心当りがなければいいんですがね……」

所長は妙にねっとりとした言い方をする、本社の役員のほうにうかがいをたてるような視線を向けた。すると、本社の役員が、

「じつはねえ、あなたのとられた契約のことなんですがね、当事者から破棄の申し入れが内々ですがわたしのところへきてるんですよ」

「長谷部さまからですか、そんな……」

登代子は絶句した。一瞬、相手の言葉が信じられなかった。契約をとったセールの自分のところにはなにも言わずに、客が直接本社に言うなんてことが

あるだろうか。

「ご不審なのはもっともですが、あなたの扱った四月十六日ぶんの五百万円ですね……。世田谷区成城の長谷部幸一氏から、本人のあずかり知らないあいだに保険の契約がされたという、苦情の申し立てが来ているんです」

「そんなことはありません。わたくしの目の前で、長谷部さまは判を押されましたもの」

登代子は喋りながら、珍しく自分の唇が痙攣^{けいれん}するのがわかった。ひどく興奮していた。

「だいいち、御本人が身体検査を承諾なさったことは、審査をしてくださった多原先生に聞いていただければわかることですわ」

登代子はおぼせるように抗弁したが、あまい、身体検査をしたことがはっと胸にきて、語尾が自然に弱まった。でも、なぜこんな馬鹿げたことがおこったのだろう。今までに一度もこんなことはなかったのに……

背の高い本社の役員は、射すような目つきでじっと登代子を見つめている。

「御園さんは、もうセールス三年のベテランでし、監督の経験も長いのですから、万一にもそのような事故は扱わないと思いますが……。どうでしょう、これから直接、お客さまのところへ行ってもらったら……」

所長の太田黒が、横から助け舟を出してくれた。

登代子としても、さしあたり契約者の本人と直接会って確かめてみるよりほかに仕方がなかった。

「ではお願いいたします。今日中に先方にお会いしますから、それまではご内聞にどうぞ……」

登代子が頭をさげて部屋を出ようとすると、太田黒が寄ってきて、

「身体検査のことがあるから困ってるんだよ。まあ、それはあとでゆっくり相談しよう」

と耳打ちをした。

さすがに所長らしく、あまい身体検査のことを見抜いている。登代子はこわい思いで太田黒を見直した。

営業所を出ても、なにか釈然としない気持だった。

この五百万円の契約は、女学校時代の友人の紹介で、向うから申し込んできた話だった。それなのに急に解約するなどということがあるだろうか。それもセールの自分に恥をかかせるようなやりかたで……。なにか不透明な蜘蛛の糸が、足もとにからみはじめたような嫌な気がする。

長谷部邸は駅から十分ほど離れた屋敷町の中の、鬱蒼とした老樹にかこまれた邸宅であった。

建物は古いが敷地は五百坪近くもあるうか、表から見たとくろ森閑と人の気配のない、さびれた感じである。

長谷部とだけ書かれた大理石の表札を見ながら、登代子は気をしゃんととりなおした。もやもやした気持ちを心の底に畳みこむ。私的な感情を顔に出さないのが、セールの初歩の心得だった。

気怠い昼下りのせいかな通りがなかった。ハンドバッグからコンパクトを取り出すと、門柱のかげでそっと化粧をなおした。母親の形見の、最近ではちょっと

手に入らないような結城大島に、絹のつづれ織の帯をきりつとしめた登代子は、どこから見ても良家の若奥様風で、清潔な色気が滲み出ている。

呼びりんを押すと、玄関のインターホンから、年とった女中の声が聞こえてきた。この前きたときから、登代子に対してあまりいい感じは持っていないような女中の声であった。

応接間に通された。あまり使わないのか、ひんやりとした埃くさい空気が漂っている。熊の毛皮や磨き上げた大きな海亀の甲羅が、マントルピースの上の壁に飾ってあった。

屋敷の主人は画商というだけで、なにをしているのかはつきりとはしない。登代子は知人の紹介で長谷部を知ったので、保険の契約をとるまでは直接の面識はなかったのだ。

「申し訳ありませんね、せっかく入った保険を解約してしまつて……旦那さまがここ一週間ノイローゼ気味で、急にあんなことをおっしゃりだしたんですよ」

茶菓を運んできた先程の年とった女中が、事情を知

っているのか、上目使いに登代子を見た。長谷部は四十歳近いというのにまだ独身である。身なりのきちんとした好男子だけに、どことなく粘液質なのが薄気味わるい。

「ご主人、ご病氣なんですか？」

「へえ、おかしいことをおっしゃって……生命保険に入ったとたんに命を狙われはじめたなんてねえ……」

長谷部は二、三日前から、保険金目当てに自分の命を狙いはじめた人間がいるから、すぐに契約を破棄すると言ひ出したのだそう。

「誰に狙われているのかと言いますとね、世の中の間全部からだなんておっしゃるんですから、ノイローゼにきまっていますよ」

「で、ご主人にお目にかかれますの？」

「へえ、今すぐ見えますよ」

女中が引きさがった。やはり運が悪かったのだと登代子は思う。相手がノイローゼでは仕方がない。その事情を話せば、本社の役員も納得するだろう。自分の勧誘員としての履歴に傷がつかないだけでも幸

いだとほっとした。

「お待たせしましたね」

長谷部は入ってくると、登代子の前のソファに腰をおろし、にこやかに微笑を浮かべた。その表情は、常人と少しも変らない。ノイローゼとは思えない。登代子が口を開く前に、

「解約の件ですがね」

と切り出した。

「じつは……あれは冗談なんです。おたくの本社に友人がいますね、それで冗談を言ったら本気にしたんですよ。解約する気はありませんから御心配なく……いや本当を言うとね、あなたと個人的に知り合いになりましたかったですよ」

「まあ、ずいぶん意地悪なはずらをなさいますのね。でもよかったですわ。わたくし本社の役員に呼ばれて叱られましたのよ。そんないかげんな契約をとったことになる、うちの会社はすぐくうさいんです。信用問題にかかりますから」

「なるほどねえ」

長谷部は相変らず機嫌よくうなずいた。ひげの剃りあががつるつるとしている。ワイシャツも、今しがた新しいのに取りかえたらしい。

「それはそうと、近頃はなかなかやかましいらしいです。ねえ、ちょっとした手術のあとがあっても入れないとか……」

「そうですね、今は血圧と潰瘍性の病氣が一番うるさいんです」

「じゃあ、僕の胃の大手術のあとなんて、絶対に駄目だったんだな」

長谷部は独り言のように言うと、テーブルの上の翡翠のはめこまれたシガレット・ケースの蓋をとって、登代子にすすめた。

「どうです、僕みたいな駄目じゃ本当は駄目だったんでしょ」

登代子が黙っていると重ねて聞いてきた。

手術のあとをごまかしても、なんとかして保険に入りたいと言ったのは長谷部のほうだった。

「あの医者じゃなければ駄目だったんでしょ。ねえ、

どうです、あの医者にあなたから幾らか掴ませたんじゃないんですか」

さすがにむっとしたが、これも仕事のうちとじっとこらえるより仕方がなかった。長谷部の言葉づかいは馬鹿ていねいだが、妙にねばっこく、有無を言わせぬ強引なところがあった。

「とんでもない、そんなことございません。多原さんは、会社でも一番信頼されているお医者さまですよ。あなたさまの手術のあとと、将来に影響がないと好意的にみてくださっただけですわ」

「ふん、そうだといんですがね」

長谷部は、唇の横にかすかな冷笑を浮かべた。

「じつは、ほかの保険会社に入入をすすめられましてね、医者診断を受けたら一ぺんではねられましたよ。この胃じゃお話にならないそうだ。なんでしたら、おたくの他の医者にみせてみましょうか」

登代子の頬に血がのぼった。いったい、この男はなにを言おうとしているのだらうか。膝のハンカチをくしゃくしゃにもてあそびながら、なんとかして心の平

静をとりもどそうと努力した。

まるで脅迫されているようである。自分のほうから頼んでおきながら、こんなことを言うなんてどういうわけなのか。さて言い返そうと思うと、なんと云ってよいのかわからなくなる。そして、こちらが本当にやましいことをしているような気持ちになってしまふ。それに五百万円の契約は大きい。

長谷部は、登代子の心の動揺をゆっくりと楽しむように、嘗^なめるような視線をはずさなかった。

「御園さん、みんな黙っていますよ。心配しなくても大丈夫です。契約も続けましょう。医者のこと黙っていてあげますよ……」

登代子が五分ほど黙っていると、長谷部が立ち上り、そばに来て登代子の顔をのぞきこんだ。「医者のこと」と言うときに、わざとゆっくり言う。別の意味を含んでいるのだろうか。登代子の心が、一瞬ひやっとする。しかし、この男がプライベートなことを知っているはずがないと、思い直した。

「お願いしますわ。せっかくお入りになったんですも

の、お続けくださいませ」

「会社には、あたしがノイローゼだと報告しておいてください。女中にもよく言っておりますから……。そのかわり、奥さんに貸しを一つ作っておきたいんですかね」

「どんなことですか」

長谷部はそれには答えないで、いきなり腕をのばすと登代子の肩を押えた。ローションの香りのする顔を近づけてくると、ふいに登代子の唇を吸った。すばやく舌をさしこんでくる。登代子は首を振って男の舌を逃がした。

「契約の印のかわりですよ。貸しはそのうちに知らせます」

長谷部はしゃあしゃあとした表情を変えず、そのまま何事もなかったように笑った。こんなときは、ことを荒立てないほうがいい。登代子のほうでもなにもなかったような顔をして応接間を出た。

唇のうえに、冷たい嫌な感触が残っていた。長谷部の粘液質の唾液が、そのまま牀に移ってくるような気